
課題 I D : 03-05-05-* -03-02

研究課題：農地の餌資源がカラス類個体数に及ぼす影響の解明

担当部署：農研機構・中央農研・耕地環境部・鳥獣害研

担当者名：吉田保志子、山口恭弘、藤岡正博

協力分担：

予算区分：交付金

研究期間：継 2002～2005 年度

1．目的

鳥類による農作物被害ではカラス類によるものが面積でも量でも最大となっている。カラス類による被害は、作物や被害時期が多岐にわたるために個別の防除対策には限界があり、長期的には個体数を抑制する個体群管理が望まれる。カラス類は水稻や麦類の収穫残渣を高い頻度で摂食することが知られているが、これら農業起源の餌量と個体数との関係はこれまで検討されたことがない。そこで、本課題では農業起源の餌の発生管理による将来的なカラス類の個体数抑制をめざして、カラス類が農業起源の餌にどの季節にどの程度依存しているのかを解明する。今年度は、採餌環境利用の調査手法を検討するほか、集合地調査により対象地域のカラス類の日常的な行動範囲を推定する。

2．方法

- (1) つくば市、牛久市、新利根町、谷和原村の水田および畑作地帯に 5ヶ所、合計 28.5km の予備調査ルートを設定し、個体数センサスおよび採餌行動の記録を行った。
- (2) 農林団地から半径約 30km 以内において、カラス類が夜間眠る集合地（ねぐら）を探索し、集合個体数の概数を目視により把握した。

3．結果の概要

- (1) 全ルートの合計で、ハシボソガラス 38 個体、ハシブトガラス 15 個体が記録され、生息密度はそれぞれ 8.4 羽/k²、3.3 羽/k²であった。生息密度が低いことから、短時間で大面積をカバーするために、自転車を用いる等の方法が適当であると考えられた。
- (2) 記録されたハシボソガラスのうち 63%の個体が採餌中であり、採餌環境の特定が比較的容易であったのに対し、ハシブトガラスでは 7%であり、採餌環境を記録するためには個体追跡等の別の手法が必要と考えられた。
- (3) 冬季調査では 9ヶ所の集合地（ねぐら）が発見された（表 1）。隣りあう集合地間の距離は 8.5km から 23km であり（図 1）、採餌地から集合地への距離が 10km に達する個体も多いと考えられた。各集合地の集合個体数は 100 羽前後から 1000 羽前後であった。ただし、個体数は概数であり、2～3 倍の誤差は考えられる。いずれの集合地もハシボソガラスとハシブトガラスの 2 種が混成していた。

表1 発見されたカラス類集合地

番号	県	市町村	区・字
1	茨城	つくば市	上大島
2	茨城	八郷町	柴内
3	茨城	八千代町	新地
4	茨城	つくば市	下平塚
5	茨城	土浦市	右粕
6	茨城	牛久市	岡見町
7	茨城	江戸崎町	椎塚
8	千葉	野田市	目吹
9	千葉	我孫子市	高野山

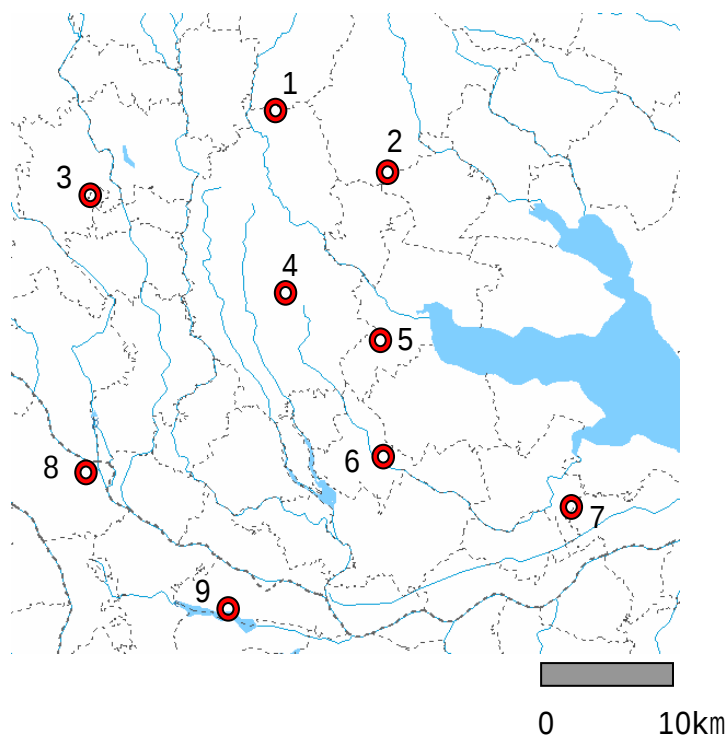


図1 茨城県南地方における冬季のカラス類集合地(ねぐら)

4．今後の問題点と次年度以降の計画

- (1) 茨城県南・県西地方で一般的な農業景観が適切に含まれる調査地を選定し、採餌環境利用の季節変化の本調査を行う。
- (2) 集合地(ねぐら)の位置や集合個体数は季節によって変化するため、夏季に追加調査を行う。

5．結果の発表、活用等

特になし